2012 年 4 月 15 日 ISSN 0916-9237

アメリカ学会会報

－The American Studies Newsletter－

No.178 April 2012

メルヴィル研究のグローバル化

牧　野　有　通

日本におけるアメリカ研究のグローバル化については，すでに広く喧伝されてきているが，わたしたち「日本メルヴィル研究センター」もメルヴィル研究を介してこの件にいくらか関わった経緯があり，それを記して，同じようなプロジェクトをお持ちの方のご参考に供したいと思う。

メルヴィル研究センターが明治大学を拠点として活動を開始したのは，1984 年に大学の国際交流委員会が招請したシカゴ大学のマーリン・ボウエン教授の連続公開講演会が直接的な契機となっている。ボウエン教授はアメリカ・メルヴィル協会の会長を経験された方であった。また同年明治大学を訪問されて，公開講演を行われたケント州立大学のサンフォード・マロヴィッツ教授も数年後同協会の会長に就任されている。わたしたちはこのお二方の講演を記録するものとして，*Sky-Hawk* というジャーナルを 1985 年 1 月に出版したが，これはその後メルヴィル研究センターの機関誌となって，科研費等の補助を受け，毎年一回，現在に至るまで 26 年間継続的に出版されてきた。

当初からメルヴィル研究センターはアメリカ・メルヴィル協会と緊密な交流を続け，同協会に *Sky-Hawk* を毎号送付するとともに，その所属メンバーのメルヴィル関連の論文や，論文訳を掲載してきた。これまで当センターが *Sky-Hawk* 等に掲載してきたアメリカのメルヴィル研究者の数は延べ 25 名を超え，また公開講演会の数もほぼ同数となっている。

1993 年に大橋健三郎氏が編集した英文共著 *Melville and Melville Studies in Japan* がアメリカの Greenwood Press から出版されたが，この研究書の出版契約が版元原版の作成を日本側に要請するものであったため，メルヴィル研究センターがその作成の任にあたった。この研究書もアメリカのメルヴィル協会員に送られ，アメリカのメルヴィル研究者たちとの交流を深める契機となった。

MLA にも登録しているアメリカ・メルヴィル協会は，毎年 12 月に総会を開催しているが，隔年ごとに国際学会をアメリカ外で行っている。たとえばギリシャの Volos Conference（1997），ハワイの Maui Conference（2003），イタリアの Rome Conference（2010）などが代表的なものであるが，それらのコンフェランスには，必ずメルヴィル研究センターの会員が数名参加して，口頭発表を行っており，アメリカやヨーロッパさらには中国や韓国のメルヴィル研究者とも交流を深めてきた。

これらの経験の上に立って，2010 年南雲堂から英文研究共著（牧野編集）*Melville and the Wall of the Modern Age* を *Sky-Hawk* 第 25 号特別号として出版することができた。この号にはカンサス大学のエリザベス・シュルツ教授が Introduction を担当してくださり，また原稿を先に送付しておいたテンプル大学のキャロライン・カーチャー教授，ノーザン・ケンタッキー大学のロバート・ウォーレス教授，そしてマサチューセッツ工科大学のウィン・ケリー教授が推薦文を寄稿してくださった。シュルツ教授，カーチャー教授，ウォーレス教授はメルヴィル協会の会長歴任者であり，ケリー教授は現在の会長である。またこの研究共著はすでにアメリカの学会機関誌数誌から書評されている。さらにアメリカの大学図書館からの問い合わせも少しずつ増えてきており，このプロジェクトもアメリカ・メルヴィル協会の幹部の人々の協力を得て，注目されてきている。

以上のような経緯から，ローマ・コンフェランスではメルヴィル協会の幹部会員から日本でのコンフェランス開催が強く要請され，予備会談に同席された慶應大学の巽孝之氏のご賛同を得て，2015 年慶應大学における東京コンフェランスの開催が予定されることになった。これがグローバル化への新たな一歩である。またそれに対応すべく，「メルヴィル研究センター」も，慶應大学，中央大学，和洋女子大学の教員のご協力を得て，「日本メルヴィル学会」へと発展的に組織改組しつつあり，2015 年に向けて持続的に活動していることも付け加えたいと思う。

（日本メルヴィル研究センター代表）

『アメリカ研究』第 47 号原稿募集のお知らせ

学会機関誌『アメリカ研究』（年報）は，2013 年 3 月に第 47 号を刊行する予定です。会員諸氏の積極的な投稿を期待します。

1. 内　　容　アメリカ研究に関する未発表論文，もしくは進行中の研究ノート。前年度に『アメリカ研究』もしくは『英文ジャーナル』に論文・研究ノートが掲載された方は，本年度の投稿をご遠慮ください。また，同じ年度に『アメリカ研究』と『英文ジャーナル』の双方に投稿することは出来ません。これは，なるべく多くの会員に発表の機会を提供するためです。
2. 枚　　数　論文は 33 字×34 行のレイアウトで 19 ページ以内（註を含む）。研究ノートは同形式で 8 ページ以内。ほかに英文レジュメ（500 語）。執筆要項は，学会ウェブサイト（http://www.jaas.gr.jp）を参照のこと。
3. 原稿締め切り期日　2012 年 9 月 4 日（火）。学会事務局に必着のこと。
4. 提　出　部　数　3 部（コピー）。提出原稿は不採用の場合もお返し致しません。

応募者は，論文題目に簡単な説明を付けて，2012 年 6 月末日までに電子メール（office@jaas.gr.jp）で，年報編集委員会宛てにお申し込みください。採否は編集委員会の責任において審査決定致します。

『アメリカ研究』第 47 号「特集論文」募集のお知らせ

会報 177 号にてお知らせしました通り，『アメリカ研究』第 47 号の特集テーマは「アングロ＝アメリカ」と決まりました。その趣旨は以下の通りです。

建国間もないアメリカが，かつての母国イギリスと砲火を交えた 1812 年戦争――その勃発から 200 年目となる今日，両国はアフガンおよびイラクでの戦争を含めた多様な局勢で，同盟関係を深めている。両国の関係は，この間二度の大戦と冷戦，ならびにそれらの終結をはさみ，密接な展開を遂げてきた。その関係の重層性を考察する際，チャーチルによる 1946 年訪米講演の基調となった「特別な関係」という概念は，有効な視座となるだろう。「英語圏国民の紐帯」を踏まえたその概念は，軍事というよりむしろ文化領域における英米の連帯意識を表す。20 年代の D・H・ロレンス，70 年代の S・スペンダーがまとめあげた独自のアメリカ研究も，いわばその認識を共有していた。

仮にそうではあっても，いまグローバル社会化のただなかにおいて，チャーチルが依拠した「英語圏国民の紐帯」なる感覚が，時代性を帯びて映るのは否めない。また，そもそもアメリカにあっては，「英語」はむしろ文学者たちの不安を形成してもきた。固有の「国語」ではない言語で「国民文学」の創成を目指す「植民地」的な困難を，彼らは抱えていたのであった。シドニー・スミスのあてこすり「アメリカの本など読む者があるか？」が如実に伝えているように，互角ではないことに対する自覚が，アメリカ文学を動機づけた。もっともそうした非対称性は，「特別」であるはずの両国関係の諸相のうちに，さまざまな角度から検証できる事柄であろう。英米間の紐帯感覚とされるものの実相は，他の国家関係と同様に，複雑な地政学的条件と絡み合いつつ変容を遂げるものである。アングロ＝アメリカの関係を，多様な時間と世界状況，さらには文化的自意識のもとに再布置し，「特別な関係」の文脈化・脱神話化を試みるような意欲的な論文を待ちたい。

「特集」に執筆希望の会員は，2012 年 6 月末日までに，氏名・所属，論文題目および構想・資料などの説明（400 字程度）を電子メール（office@jaas.gr.jp）で，年報編集委員会宛てにお申し込みください。その際の Subject は，「『アメリカ研究』特集応募」と明記するようお願いいたします。執筆要項は，学会ウエブサイト（http: //www.jaas.gr.jp）を参照のこと。締め切りは，2012 年 9 月 4 日（火）学会事務局に必着のこと。

理事選挙の選挙結果について

去る 1 月 17 日に締められた理事選挙の結果が，砂田一郎会員・砂田恵理加会員の立ち会いのもと，1 月 21 日に行われました。

投票総数は 176 票となり，集計の結果，理事については上位 36 名が選出されました。また，監事 3 名は得票順に 3 名を決定致しました。さらに 6 月の理事会で推薦理事を 4 名決定し，理事全員が確定することになります。

理事 36 名（50 音順）

阿部珠理（立教大）
生井英考（立教大）
宇沢美子（慶應義塾大）
遠藤泰生（東京大）
大塚寿郎（上智大）
大津留（北川）智恵子（関西大）
小塩和人（上智大）
川島浩平（武蔵大）
貴堂嘉之（一橋大）
久保文明（東京大）
小檜山ルイ（東京女子大）
佐々木卓也（立教大）
佐藤千登勢（筑波大）
下河辺美知子（成蹊大）
舌津智之（立教大）
巽　孝之（慶応義塾大）
田中きく代（関西学院大）
中條　献（桜美林大）
中野勝郎（法政大）
中野　聡（一橋大）
長畑明利（名古屋大）
西崎文子（東京大）
新田啓子（立教大）
能登路雅子（東京大）
橋川健竜（東京大）
樋口映美（専修大）
藤本　博（南山大）
増井志津代（上智大）
松本悠子（中央大）
村田晃嗣（同志社大）
森本あんり（国際基督教大）
矢口祐人（東京大）
山田史郎（同志社大）
李　鍾元（立教大）
和田光弘（名古屋大）
渡辺　靖（慶応義塾大）

監事 3 名（50 音順）

大西直樹（国際基督教大）
粂井輝子（白百合女子大）
前川玲子（京都大）

アメリカ学会第46回年次大会プログラム

本年度より，自由論題の報告時間帯が変わります。A〜E それぞれの会場において，まず，各報告者が20分ずつ連続して報告を行い，その後，すべての報告に対するコメントと質疑応答のセッションをまとめて行います。

1. 月　日　2012年6月2日（土）　6月3日（日）
2. 場　所　名古屋大学東山キャンパス
〒464-8601 名古屋市千種区不老町
会場校連絡先　和田光弘（電話：052-789-2232　E-mail：mwada@nagoya-u.jp［ac.はありません］）
内田綾子（電話：052-789-4984　E-mail：uchida@nucc.cc.nagoya-u.ac.jp）
3. 受　付　6月2日（土）・3日（日）　全学教育棟本館1階ホール
4. プログラム　（詳細は大会当日に受付で配布する「大会要項」に明記します。）

第1日　6月2日（土曜日）

自由論題A　〈アメリカ表象〉　［全学教育棟本館1階C13教室］（9：30〜12：00）
司会　中野　聡（一橋大学）　コメント　杉田米行（大阪大学）
谷口真紀（関西学院大学（院））　「満州事変後の新渡戸稲造のアメリカ講演――「太平洋の橋」として」
Pallavi Bhatte（京都大学（院））　“Revisiting India’s Quest for Independence Through a Transatlantic Dialogue: The Indian Diaspora’s Challenge to The Empire in the United States”
田中真奈美（東京未来大学）　「アメリカでの長期海外生活がアイデンティティに与える影響の考察――アイデンティティアンケートの分析から」
小森真樹（東京大学（院））　「アメリカ合衆国における創造科学の博物館教育――ケンタッキー州ピーターズバーグ Creation Museum の展示における娯楽性の考察」

自由論題B　〈日系アメリカ人〉　［全学教育棟本館1階S11教室］（9：30〜12：00）
司会　武田興欣（青山学院大学）　コメント　和泉真澄（同志社大学）
星野統明（コーネル大学（院））　「内乱の予兆――シブタニ・タモツの日系部隊研究について」
堀江里香（名古屋大学（院））　「「後藤潤」像変容のポリティクス――ハワイ官約移民の歴史的位置付けをめぐる一考察」
牧野理英（日本大学）　「Karen Tei Yamashita の『オレンジ回帰線』における南米移民主体とそのポストコロニアル精神に対する批判」

自由論題C　〈文学と映画〉　［全学教育棟本館1階C15教室］（9：30〜12：00）
司会　下河辺美知子（成蹊大学）　コメント　西谷拓哉（神戸大学）
竹野富美子（名城大学（講））　「Hawthorne と Transnational Imagination――博物館としての “The Virtuoso’s Collection”」
福田敬子（青山学院大学）　「ヘンリー・ジェイムズとイザベラ・スチュワート・ガードナー――明治期の日米芸術交流がアメリカ文学に及ぼした影響についての一考察」
塚田幸光（関西学院大学）　「フリークス・アメリカ――ヘミングウェイ，ロン・チャニー，身体欠損」
川本　徹（日本学術振興会特別研究員）　「自然を見ることの政治学――『西部開拓史』，『2001年宇宙の旅』，モニュメント・バレー」

自由論題D　〈革新主義〉　［全学教育棟本館1階S10教室］（9：30〜12：00）
司会　樋口映美（専修大学）　コメント　松原宏之（横浜国立大学）
上野継義（京都産業大学）　「「安全第一」運動における訪問看護婦協会の働き――「母性」思想の革新とその限界」
梅本和弘（京都大学（院））　「1910年代における衛生映画」
大鳥由香子（東京大学（院））　「ジェーン・アダムズの「平和」をめぐる思考と実践」
春田素夫　「連邦準備銀行所在都市選定のロジック」

自由論題E　〈自由と反共〉　［全学教育棟本館1階C14教室］（9：30〜12：00）
司会　大津留（北川）智恵子（関西大学）　コメント　飯田　健（神戸大学）
藤岡真樹（京都大学（院））　「「大学」に見るアメリカ合衆国の反共主義の歴史的動態」
青砥吉隆（国際基督教大学（院））　「「自由という大義」におけるアメリカのリーダーシップとアポロ計画」
森山貴仁（京都大学（院））　「ダイレクトメールの政治――リチャード・ヴィグリーと1960年代・1970年代の保守主義運動」

昼食休憩（12：00〜13：15）

理事・評議員会（12：05〜13：05）［全学教育棟本館 1 階 S1X 教室］

会長講演（13：15〜14：50）［IB 電子情報館 2 階大講義室］
司会　古 矢　旬（東京大学）
Priscilla Wald（ASA President, Duke University）
“Biophobia: Fear of Life in the Age of Biotechnology”
紀 平 英 作（アメリカ学会会長，帝京大学）
“The Politicization of the Slavery Issue in the Early Republic”

清水博賞・齋藤眞賞　授賞式（14：55〜15：05）［IB 電子情報館 2 階大講義室］

シンポジウム（15：10〜17：40）［IB 電子情報館 2 階大講義室］
「「米国衰退論」再考」
司会　西 崎 文 子（東京大学）
報告者　佐々木卓也（立教大学）「アメリカ「衰退論」と外交論争」
佐 藤 丙 午（拓殖大学）「軍事政策に見る米国衰退論への対処――「行動の自由」の希求に向けて」
河 村 哲 二（法政大学）「グローバル資本主義化によるアメリカ経済の新たな発展構造とその限界――戦後パックス・アメリカーナの衰退と転換との視角から」
宇 沢 美 子（慶應大学）「「嘘が真実を暴く」――大企業アメリカのグローバリゼーションをすっぱ抜く The Yes Men の笑いの戦略」

懇親会（18：00〜20：00）［南部食堂 1 階　Mei-dining］

****

第 2 日　　6 月 3 日（日曜日）
部会 A「連続企画　アメリカの教え方（大学院教育）」　［全学教育棟本館 1 階 C13 教室］（9：30〜12：00）
司会　大 塚 寿 郎（上智大学）
報告者　吉 原 真 里（ハワイ大学）「アメリカの大学院におけるアメリカ研究の教え方」
矢 口 祐 人（東京大学）「アメリカ研究を教える学部と大学院間の「ダイアローグ」を求めて」
細 谷 正 宏（同志社大学）「アメリカ研究科からグローバル・スタディーズ研究科へ――同志社大学の 20 年（1991－2010）を振り返る」

部会 B「食と住の社会正義」［全学教育棟本館 1 階 C15 教室］（9：30〜12：00）
司会　伊 藤 詔 子（広島大学（名））
報告者　松 永 京 子（神戸市外国語大学）「アグリビジネスへの抵抗――ルース・L・オゼキの小説にみるアグリカルチュラル・アクティヴィズム」
二 村 太 郎（同志社大学）「ローカルフード運動がもたらす地域社会の変革と課題――誰のためのどのような「正義」なのか？」
宮田伊知郎（埼玉大学）「ジョージア州アトランタの反都市開発運動における「公共」と「住環境」に関する一考察」
コメント　藤 岡 伸 子（名古屋工業大学）

Workshop A　［Liberal Arts & Sciences Main Bldg. 1st Fl. Room S1X］（9：30〜12：00）
“Comparative Empire and the Making of the Pacific World I: Ways of Encounters”
Chair:　Satoshi Nakano（JAAS, Hitotsubashi University）
Panelists:　Meg Wesling（ASA, University of California, San Diego）　“When School Begins: Empire, Education, and Rights in the Philippines and Hawai‘i”
Seongho Yoon（ASAK, Hanyang University）　“‘Being in a Place, Not Being There’: Suburban Imaginaries, Encounters of the Pacific World in Chang-Rae Lee’s *A Gesture Life*”
Taihei Okada（JAAS, Seikei University）　“Competing Histories: History Education under U.S. Colonialism in the Philippines”
Commentators: Sangjun Jeong（ASAK President, Seoul National University）
Catherine Ceniza Choy（OAH, UC Berkeley）

昼食休憩（12：00〜13：30）

分科会（12：10〜13：25）（内容については，以下を参照）［全学教育棟本館 1 階各教室］

新理事会（12：10〜13：20）［全学教育棟本館 1 階 S10 教室］

総　会（13：30〜14：00）［全学教育棟本館 3 階 S30 教室］

部会 C「左右の大衆運動」［全学教育棟本館 1 階 C13 教室］（14：10〜16：40）

司会　渡 辺　靖（慶應大学）

報告者　中 野 博 文（北九州市立大学）「保守主義時代の政治運動――運動を支える危機意識の歴史的変容」

地 主 敏 樹（神戸大学）「所得分配の変化と大衆運動」

前 嶋 和 弘（文教大学）「変わるメディア，変わる大衆運動――ティーパーティ運動とウォール街占拠運動を例にとって」

コメント　細 野 豊 樹（共立女子大学）

部会 D「災害と表象」［全学教育棟本館 1 階 C15 教室］（14：10〜16：40）

司会・コメント　新 田 啓 子（立教大学）

報告者　藤 井　光（同志社大学）「災害の「いま」をめぐって――物語・戦争・動物」

渡邉真理子（西九州大学）「災害とサバイバル・ナラティブ――ゼロ年代を中心に」

生 井 英 考（立教大学）「惨事のあと――社会的風景」

Workshop B［Liberal Arts & Sciences Main Bldg. 1st Fl. Room S1X］（14：10〜16：40）

"Comparative Empire and the Making of the Pacific World II: Views from the Other Shore"

Chair: Yuka Tsuchiya (JAAS, Ehime University)

Panelists: Chia Youyee Vang (ASA, University of Wisconsin-Milwaukee) "Interpreting Empire from Below: Memory and Legacy of War from the Margin"

Kosuzu Abe (JAAS, University of the Ryukyus) "Tomodachi, Rape, Agreement and Denial: Hate Speech and the Making of the 'Asia-Pacific'"

Scott Laderman (OAH, University of Minnesota, Duluth) "Pacific Waves: Tourism, Surfing, and Empire in Nineteenth- and Twentieth-Century Hawai'i"

Commentators: Priscilla Wald (ASA President, Duke University)

Danielle McGuire (OAH, Wayne State University)

5. 1）懇親会は事前の申し込みが必要です。懇親会費 6,000 円は同封の払込用紙にて 5 月 7 日（月）までにご納入下さい（期日厳守）。払い込まれた懇親会費はいかなる事情があってもお返しできませんので，ご注意ください。

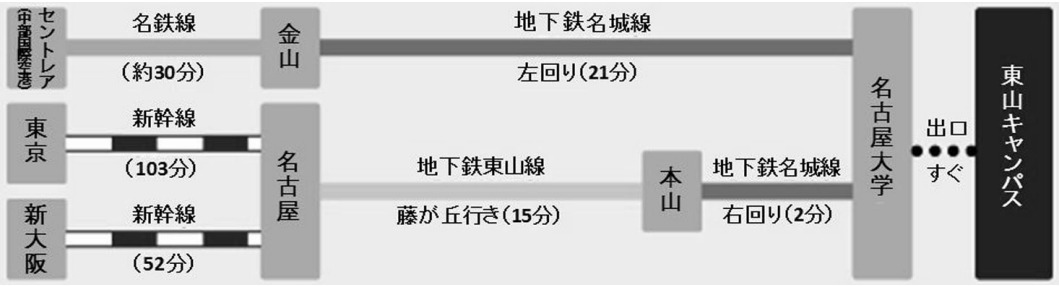
2）年会費の当日払いは受け付けられませんのでご了承ください。

3）非会員の大会参加費は 1,000 円です。会場受付にてお支払いください。

6. 1）昼食：2 日（土）は，大学構内の南部食堂 1 階　Mei-dining，北部食堂（北部厚生会館 2 階）で飲食できます。3 日（日）は閉店していますので，大学周辺の飲食店を利用されるか，各自お弁当をご用意ください。学内や周辺にコンビニ（コピー機あり）もあります。会場ではなるべくゴミを出さないよう，ご協力をお願いいたします。

2）名古屋大学では，指定喫煙場所以外は，禁煙となっています。

名古屋大学東山キャンパスまでの交通案内



宿泊案内

宿泊施設のご案内はとくに致しません。大会会場に一番近い繁華街は栄です。栄や名古屋駅周辺に多くのホテルがあります。

名古屋大学東山キャンパス構内図

矢印のついた建物が会場になります。

会場案内　（6月2日（土）・3日（日）共通）

受付	全学教育棟本館1階ホール
会員用休憩所	全学教育棟本館1階ホール横
書店等の出展	全学教育棟本館1階ホール
役員控室	全学教育棟本館1階 C11
外国人ゲスト控室	全学教育棟本館1階 C10
本部・スタッフ控室	全学教育棟本館1階 C12

6月2日（土）

午前　自由論題　全学教育棟本館1階各教室
昼食時　理事・評議員会　全学教育棟本館1階 S1X 教室
午後　会長講演・授賞式・シンポジウム　IB 電子情報館2階大講義室
懇親会　南部食堂1階　Mei-dining

6月3日（日）

午前　部会及びワークショップ　全学教育棟本館1階各教室
昼食時　分科会　全学教育棟本館1階各教室
　　新理事会　全学教育棟本館1階 S10 教室
　　総会　全学教育棟本館3階 S30 教室
午後　部会及びワークショップ　全学教育棟本館1階各教室

第46回年次大会　分科会（12：10〜13：25）のご案内

（　　）は責任者および連絡先。会場はすべて全学教育棟本館1階の教室です。

1.　アメリカ政治（平体由美（札幌学院大学）pxc02740@nifty.com）S12 教室
テーマ：難民の受け入れと定着をめぐる確執
報　告：大津留（北川）智恵子（関西大学）
難民の受け入れは，人権を重視するアメリカにとって自らのアイデンティティを象徴する行為である。アメリカにとって負荷と見なされる非合法移民が排除される一方で，虐げられた人びとには門戸が開かれてきた。ところが，難民受け入れが外交政策の一環として連邦政府により決定される一方で，受け入れられた人びとを包摂していくのは個々のコミュニティの課題であり，そこでは理念と現実の間の確執が生じている。本報告は，難民，特にアメリカ外交の帰結として生じたイラク難民に焦点を当て，二次的移動により集住が加速するデトロイトなどの現地調査に基づいて行う。極めて政治的な背景を持ちながら，同時に普遍的な人道主義の側面をも持つイラク難民の受け入れに，現地コミュニティが道義的，政治的，戦略的な観点から取り組む現状を分析していく。激論が交わされている移民政策と通底する論点を導き出し，アメリカ社会の構成員の線引きという根幹に関わる議論の材料としていきたい。

2.　経済・経済史（名和洋人（名城大学）nawa@meijo-u.ac.jp）S15 教室
テーマ：アメリカ洪水対策の転換――1928年洪水防御法の成立
報　告：伊澤正興（阪南大学）
1928年洪水防御法の成立はアメリカにおける洪水対策に決定的な変革をもたらした。なぜなら，同法の成立意義は，堤防建設と密接に結びついた土地開発から，放水路，貯水池，土壌保全，森林管理など多目的対策への転換点となったためである。このことは，洪水対策が州主体から連邦介入の拡大に対応しており，いわば，洪水対策の歴史は土地問題から憲法問題にいたるまで多岐にわたる。本報告では，湿地開発と洪水対策の関係史をたどるなかで，洪水防御法の成立意義について議論していく。

3.　アメリカ女性史・ジェンダー研究（松原宏之（横浜国立大学）hiro-m@ynu.ac.jp）S17 教室
テーマ：身体的障害と男性性の喪失――大量生産時代におけるピッツバーグの鉄鋼労働者を事例に
報告：畠山　望（東京大学（院））
19世紀後半からの機械による大量生産の時代に入ると，アメリカの工業都市では仕事場での事故による怪我が深刻な問題となっていった。それ以前は，重労働の過程で身体的障害を負うことは労働経験の証として労働者間で称えられ，男性性の象徴として受容されていた。しかし，大量生産時代以降，機械事故によって障害を負った者は，社会や家庭において身体的，かつ金銭的な「重荷」と考えられるようになった。障害を負うことは，一面においては男性性の喪失と結び付けられるようになったのである。本報告では，ペンシルベニア州ピッツバーグ及びその周辺地域の鉄鋼労働者を事例として取り上げ，鉄鋼労働者の間でどのように身体的障害が男性性の喪失と結び付けられて語られたのかを，鉄鋼組合発行の新聞（*The Amalgamated Journal*）等を基に検証する。特に，事故が最も多かった1906年から，障害者に対する補償を義務化した「労働者補償法」（Workmen's Compensation Law）が成立する1910年代に注目して考察する。

4.　アメリカ国際関係史研究（藤本　博（南山大学）hiroshif@nanzan-u.ac.jp）S13 教室

1）研究報告

テーマ：米国の親イスラエル政策の形成――ジョンソン政権の中東における冷戦戦略を中心に

報　告：富永枝里香（大阪大学（院））

本報告では，米国のイスラエルへの経済，軍事，外交面での支援を拡大したジョンソン政権に注目し，第三次中東戦争最中に起こったリバティ号事件に対する対応およびイスラエルへの F-4 ファントム戦闘機売却決定を対象に，米国がいつ，どのようにイスラエル寄りの中東政策を形成したかを明らかにする。

2）書評会

『冷戦――アメリカの民主主義的生活様式を守る戦い』（有斐閣，2011 年）

著者：佐々木卓也（立教大学）

評者：菅　英輝（西南女学院大学）

本書は，「冷戦」に関して学術的議論をふまえながらコンパクトにまとめたもので，「冷戦」を米国外交の史的展開の中で位置づけるとともに，米国内の外交論ならびに米国の内政との相互作用との関連において論述している点に特徴がある。本分科会では，評者によるコメントをもとに，著者によるレスポンスを交えて「冷戦」把握をめぐる活発な議論を期待している。

5.　日米関係（浅野一弘（札幌大学）k-asano@sapporo-u.ac.jp）S14 教室

テーマ：ABCC（原爆傷害調査委員会）と被曝線量推定方式

報　告：高橋博子（広島市立大学広島平和研究所）

討　論：清水隆雄（元国立国会図書館）

ABCC（原爆傷害調査委員会）は，広島・長崎での原爆による放射線の人体への長期的影響調査継続のため，1946 年 11 月 26 日付けのトルーマンの承認によって設立された。ABCC は全米科学アカデミー・学術会議の管轄であったが，マンハッタン計画を引き次いで設立された米原子力委員会が研究資金を提供していた。一方日本側からは 1947 年から 57 年の間，多額の予算が厚生省予防衛生研究所から出されていた。

ABCC は入市被曝者や黒い雨等，残留放射線の調査を行っており，また米原子力委員会は，世界に広がる放射性降下物の研究を行い，内部被爆資料を収集していた。しかしネヴァダ核実験と広島・長崎の情報から作られた被曝線量推定方式では，残留放射線や内部被曝の影響は反映されなかった。

本報告では，原爆症認定集団訴訟や福島第一原発事故を通して浮き彫りになった内部被曝問題を軽視した日米共同研究の問題について歴史的に検証する。

6.　アメリカ先住民研究（佐藤円（大妻女子大学）mdsato@otsuma.ac.jp）S18 教室

テーマ：アメリカ先住民文化復興の現在――ラコタ・スー族の事例を中心に

報　告：阿部珠理（立教大学）

1960 年代以降高まりを見せてきた先住民各部族の文化復興運動は，あきらかに時代の政治イニシアチブに触発され，アクティヴィズムと相補的に展開されてきた。その後 1980 年代以降のレッドパワームーブメント沈静化をへて，文化復興は今独自の運動としてどうような様相を呈しているのか。それは 60 年代に勃興した汎インディアンのベクトルで継続・拡大しているのか，あるいは部族回帰のベクトルを示しているのか。報告者は主に後者の傾向をラコタ・スー族社会における文化復興運動に認め，部族伝統，部族語，部族固有の儀式の再生・維持が部族生活のどのような場面で試みられ，またその担い手たちは，だれであるのかをフィールドワークを通して明らかにしたい。具体的には，ローズバッド・スー部族議会，部族大学，初等・中等教育機関の営為に光をあて，社会・経済開発までを射程におく彼らの活動を紹介したい。

7.　初期アメリカ（橋川健竜（東京大学）kenryu@ask.c.u-tokyo.ac.jp）S19 教室

テーマ：独立期アメリカの理想的人間像――ペインとラッシュが描く独立論の一側面

報　告：高橋貴之（名古屋大学大学院修了）

近年，日本でも革命期・建国期の思想史研究が再び活発化し，若手研究者も意欲的な論考を発表している。本年はトマス・ペイン研究者である高橋貴之氏から，アメリカ独立戦争期のフィラデルフィアで活躍した社会思想家であるベンジャミン・ラッシュとトマス・ペインの描いたアメリカ独立論，女性論，教育論を通じて，アメリカという新たな社会の形成主体となる理想的な人間のあり方について報告をいただく。報告では，大森雄太郎『アメリカ革命とジョン・ロック』（2005 年）や田中秀夫『アメリカ啓蒙の群像』（2012 年）を踏まえつつ，ペインとラッシュがそれぞれの著作の中で描いた理想的なアメリカ人像を分析し，政治・経済・医療政策を以って，奴隷・女性・精神障害者といった人々を救済の対象としたラッシュと，すべての人々を社会の形成主体に包摂しようとしたペインの描く人間像の違いを示すことを予定している。会員諸氏の積極的参加を期待している。

8. アジア系アメリカ研究（野崎京子（京都産業大学（名））nozaki@cc.kyoto-su.ac.jp）S16 教室

テーマ：1）日本人のアジア系アメリカ文学研究者として，アジアの学会で「戦争」について考える

2）「戦争記憶」を語る――加害者でなく，被害者でもなく

報　告：

1）山本秀行（神戸大学）

「戦争記憶」をメインテーマにした，The Third International Conference on Asian British and Asian American Literatures が，2011 年 12 月 9 日～10 日に台湾の中央研究院（Academia Sinica）において開催された。開催地台湾をはじめ，アメリカ，カナダ，イギリス及びアジア各国の総勢 30 人余りの研究者によって，「ヒロシマ・ナガサキ」「南京事件」「ヴェトナム戦争」「日系人強制収容」などのテーマの講演・セッションが行われ，聴衆を交えて熱論が交わされた。本分科会においては，その学会に発表者として参加した日本人研究者二名（山本，山口）が，アジアの学会で「戦争」について考えるさいにいかなる困難を感じ，そして，その経験によって何を得たかについて報告したい。

2）山口知子（関西学院大学（講））

「戦争記憶」について議論する際，victim vs. victimizer という図式が浮かび上がるのは避けがたいが，二項対立図式に収束する議論は不毛である。より中立的立場で論を展開するため，本発表では日系アメリカ人の強制収容をめぐる記憶を考察の対象とし，戦争直後・リドレス期・9.11 以後とそれが変化する過程を示す。戦争記憶もまた創造され変容するものであり，望ましい記憶共有のためには，被害者/加害者といった立場を超えた，より幅広い「私たち」の意識が必要であることを説く。

9. 文化・芸術史（小林剛（関西大学）go@kansai-u.ac.jp）C14 教室

テーマ：展示の政治学

報　告：1）丸山雄生（一橋大学（院）），2）横山佐紀（国立西洋美術館）

コメント：江崎聡子（東京工業大学）

ミュージアムにおける展示が，単なる既存の美意識や価値観を公衆に伝えるというよりも，多様なエージェントの関わりを通じてより能動的に文化的意味や権力関係を構築していくきわめて政治的なプロセスであることは近年とみに言われていることである。今回の分科会では，こうした観点から様々なミュージアム表象と展示の問題に迫っている若手研究者三名に報告とコメントを行ってもらいながら，「展示」という行為が持つ文化的機能について参加者間で活発な議論ができればと考えている。報告タイトルは，1）「博物館とスペクタクルな文化――アメリカ自然史博物館による動物映画の活用」（丸山），2）「チャールズ・ウィルソン・ピールのミュージアムとアメリカ（仮題）」（横山）を予定している。

第 47 回年次大会企画・報告募集のお知らせ

第 47 回年次大会は，2013 年 6 月に，東京外国語大学で開催されます。日程は，次号会報にてお知らせします。企画提案やご報告希望を下記の通り募集いたしますので，会員のみなさまからの積極的な応募をお待ちしております。部会につきましても，一般会員からのご提案に基づいて企画されますので，よろしくお願いいたします。なお，すべての応募は事務局＜office@jaas.gr.jp＞宛に，1～3 のうち該当する件名を明記し，それぞれの締切日厳守でお申し込みください。

1. 「自由論題報告申し込み」（締切日：11 月 20 日）
   報告テーマ，1,500 字程度の要旨，およびキーワード 5 つを記載。自由論題での報告は会員に限られます。非会員による申し込みは，締め切り日までに入会手続きを行っている場合のみ，応募内容を暫定的に受理し，入会が認められた時点で正式に審査対象としますので，ご注意ください。また，2013 年の 5 月 15 日までにペーパー（和文の場合 8,000 字～12,000 字，英文の場合は 5,000～7,500 words 程度）を提出していただき，それを学会のホームページに掲載します。学会員にはパスワードを通知し，年次大会の前後 2 週間のみ，ペーパーを読むことができるようにします。なお，大会当日の報告時間は 20 分とし，報告は 2 年連続を上限とします。
2. 「部会の企画提案」（締切日：8 月 31 日）
   部会のテーマおよび 800 字程度の要旨。報告者案があれば合わせてお願いしますが，部会の企画に関しては，以下のような申しあわせ事項がございますので，ご留意ください。第 45・46 回大会の部会・シンポジウム・ワークショップでの報告者は，第 47 回大会の部会では報告できません。司会者，討論者として応募されることも，原則避けてください。登壇者の過半数は学会員であることとします。また，司会者には大会までの連絡調整などをお願いするため，原則学会員としてください。学際性を重視し，バランスの取れた登壇者の構成となるよう配慮してください。会員以外の部会登壇者に対して，謝金，交通費などが学会からは支払われませんので，ご了解ください。
3. 「分科会開催申し込み」（締切日：8 月 31 日）
   新規の場合は，分科会趣旨（400 字以内），分科会連絡責任者氏名および賛同者 5 名の氏名。継続の分科会も，分科会責任者氏名を添えて，継続する旨お知らせください。

なお，全ての企画内容の最終決定は，年次大会企画委員会の提案に基づいて常務理事会で行います。応募された内容に関して調整をさせていただく場合があることを，あらかじめご了解ください。

年次大会企画委員会

新　刊　紹　介

久保文明 編

『アメリカ政治を支えるもの――政治的インフラストラクチャーの研究』

（日本国際問題研究所，2010 年，2,940 円）

財団法人日本国際問題研究所による「JIIA 現代アメリカ」シリーズの最新巻（第 9 巻）は，「政治的インフラストラクチャー」（以下，政治インフラと略記）という，日本人には聞き慣れず，理解が難しい，しかし重要な概念を対象とした研究書である。

序章・久保論文によれば，政治インフラとは，「直近の選挙や政治過程において影響力を発揮するだけでなく，中長期的かつより一般的な政治的影響力の増進を目的として，特定の政治勢力あるいは特定の政策専門家集団が構築し，あるいは利用する団体・組織・制度」と定義される。この政治インフラを体系的に学ぶ理由は，現代アメリカ政治のあらゆる側面においてプレゼンスが高まっているからに他ならない。他方，政治インフラは，その影響力を厳密に捉えることが難しいため，本国アメリカでは研究が進んでいない。しかし，「たとえ研究上の困難が巨大であったとしても，とりわけ，方法論上の問題を抱えているにしても，研究しなくてよいということにはならない」との認識に基づき，本書では，12 人の研究者・実務家によって，各種の政治インフラが登場・発達し，政党との関わりを深めてきた経緯が詳述される。

本書は三部からなり，第一部では，財団，シンクタンク，メディア，オピニオン誌，メディア監視団体が，第二部では，宗教団体，法曹，コミュニティー・オーガニゼーション，軍，政治家養成機構がそれぞれ取り上げられている。加えて，第三部で，対日政策と対中国政策に関わる政治インフラの動向が紹介される。アメリカ政治研究が他の地域の研究と大きく異なる点は，情報の不足よりも情報の過多に悩まされることである。各分野の専門家による情報の精査が為された本書を学ぶことによって，リアル・タイムの報道や論説において政治インフラが登場する際に，何が本当に適切あるいは重要なことであるかを判断することが格段に容易になるであろう。

本書のもうひとつの意義は，政治インフラを学ぶことで，中長期的なアメリカ政治の変動をよりよく理解できることである。各章が指摘する政治インフラの発展の経緯は，リベラルの優位に気付いた共和党（主に保守派）が政治インフラを構築することで優位に立ち，これを受けて民主党勢力が政治インフラの強化を図り，現在に至る，というものである。この，リベラル優位→保守化→分極化という流れは，ニュー・ディール以降のアメリカの政党政治全体の流れと符合するものである。政党制の変化は，様々な要因が互いにかつ長期的に影響し合うことで進行する複雑なプロセスであり，本書は，このブラック・ボックスをこじ開ける作業として読むこともできる。

後続のアメリカ研究者にとっては，政治インフラの展開を継続的にフォローする作業，および，政治インフラの発展と政党制との因果関係やその経路をより厳密に検証する作業が，大きな課題となるであろう。

松本俊太（名城大学）

植木照代　監修，山本秀行/村山瑞穂 編

『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』

（世界思想社，2011 年，2,800 円）

協定校があるため，毎年のようにベトナムへ行く。タンソニュット空港で知人と会い，日本企業の立て看板が林立するなかを宿へと車で向かうと，自分の感覚が若干ながら変化している。空気のように不感無覚だった日本の現実，そのなかで考えていた合州国の問題，もはや日本にいる時とは同じではない。

このホーチミンの街で『ディア・ハンター』のような映画を観たら，自分にはいかなる感情が生起するのだろうか。反戦映画としての側面を持ち，象徴性が評価される『地獄の黙示録』でさえ強い違和感を呼び起こすことが想像される。真摯な取り組みであり，確かな共感を誘うティム・オブライエンの作品すら読む気が起きない。

こんな文章が『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』の書評の前置きならば，読者の多くは批判，あるいは非難が続くと予想されよう。しかし，私の意見はその逆である。私たちの感覚，想像力が日本，合州国，そしてアジアでかたちづくる構図にぎくしゃくしたものがあるとしたら，いや，ひとつの構図すら描き得ていないとしたら，私たちが真っ先に手に取るべき書物のひとつが，この『アジア系アメリカ文学を学ぶ人のために』ではないだろうか。

日本で外国文学の研究者といえば，数の上では英米文学が他を圧倒する。めこん（例えば『ベトナム戦争の「戦後」』といった出版物が頭に浮かぶ）のような志の高い出版社はあるものの，ベトナム文学，ベトナム・ディアスポラ文化に関する私たちの知識は限られている。合州国中心に世界が回っていた二十世紀が終わって久しい現在，こうした偏りがいずれは是正されてゆく予感がするとは申せ，英語圏，殊に合州国（から）の情報は膨大である。その中からアジアを考える手掛かりを得られることは貴重だと言えよう。日本，アジア，合州国が織りなす構図の是正へ向けて，知の三角測量が始まるのである。

合州国におけるアジア系文化がアジア諸国の文化そのものではないし，合州国文化の一部として捉えなければならないのは勿論のことである。しかし，例えばエミコ・オーモリの『月のうさぎ』を観て日系合州国市民の直面した問題を考えることが第二次世界大戦に至る時期の朝鮮半島と日本の問題を視野に入れることへと繋がるのならば，得るものは大きかろう。

本書にある一番の美質は充実の一途をたどるアジア系合州国文学の姿を多面的に捉えていることにある。カタログとしての性格もしっかり備えている。そして，アジア系のみならず合州国文学の新たな台風の目と考えて差し支えないカレン・テイ・ヤマシタの分析で幕を閉じる。地域研究の入門書として優れているのみならず，地域研究に閉じこもらない知的冒険の可能性をも示唆している点で，知の三角測量に繋がるであろう本書に敬意を表する。

村上　東（秋田大学）

谷岡知美 著

『アレン・ギンズバーグ――カウンターカルチャーのビート詩人』

（英宝社，2011 年，3,360 円）

本書は，詩人アレン・ギンズバーグへの愛に溢れた研究書である。「『ビート世代』の中心的役割を担う，アレン・ギンズバーグの詩の文学的価値を問うこと」を「主たる目的」とする。著者の主眼は，ビートが主に「文化」現象として語られ，ギンズバーグが「『文化的重要人物』として位置づけられている」現況に対して，「彼の詩の重要性を問うこと」にあり，そのため 1950 年代から 70 年代の代表的な詩作品「吠える」「カディッシュ」『アメリカの没落』の考察に絞っている。第一章では，「吠える」を通して，ギンズバーグを「預言者的詩人」としてだけでなく，「アメリカのエレミヤ」の系譜に位置づける。第二章では，「カディッシュ」を通して，「伝統的なエレジー」を解体する「反エレジー」を創作したことを検証し，さらに「この『反エレジー』をも解体したこと」にふれる。第三章では，「渦巻派」の理論を中心に『アメリカの没落』を考察し，「［1960 年代の］アメリカの旅と［語り手の］意識の旅」が「交錯しながら，作品全体を『渦』の構図に創りあげているよう」だと結論づける。第四章では，ギンズバーグの「長息詩行」を観点に，再び三作品を通して，「『息』の詩人」としての詩学を分析する。

著者は，ギンズバーグの詩を幅広い層に読んでもらいたい，という願望から，まえがきで「『アメリカ文学』といった専門的な難しいことではなく（中略）『ビート』ということばに興味を持つあらゆる人に対して，本書を軽い気持ちで読んでもらう」ように呼びかけているが，本章は，著者の学会誌の論文や学位論文にもとづいており，詳細な英語の注が列挙された論述といい，とうてい「軽い気持ちで」読めるものではない。「関係代名詞」や「語り手 “I”」の分析を行い，伝統的エレジーとしてシェイクスピアやシェリーを参照するなど，詩として本格的に論じたことに本書の成果が見られるので，大衆化しようと苦心した書名やまえがきで，本章の学術的な詩論の体裁を曖昧にしてしまったのは，かえって勿体ない。

また，ギンズバーグを愛するあまり，なのかもしれないが，他の詩人への言及には，少々誤解が見られるように思う。たとえば，序章で「『吠える』の詩形は，英米文学において，それまでには見られなかったような新しい詩形」（15）と断言しているが，本書でホイットマンの自由詩形の影響についての多くの先行研究を（おもに注でそのまま）紹介しながら，「預言者的詩人」の系譜も含めて，ホイットマンの影響を過小評価した言い過ぎの感が否めない。さらに，第三章で渦巻派の重要性を論じるなかで，「『渦巻派』の提唱者の一人であるパウンドは，その後『イマジズム』（Imagism）を掲げることになる」と述べているが，パウンドの詩学においては，イマジズム（1912 年）から渦巻派（1914 年）へ移行すると理解するのが筆者には一般的だと思われる。

著作物につきものの不備も指摘してしまったが，このようにギンズバーグの詩への愛に溢れた研究書が新しく出版されたことは喜ばしい。

梶原照子（明治大学）

麻生享志 著

『ポストモダンとアメリカ文化――文化の翻訳に向けて』

（彩流社，2011 年，2,500 円）

いまや「ポストモダン」と「アメリカ文化」を結びつけて論じること自体に新味はない以上，本書の表題を目にしてまず危惧されるのもやはり，類書にはない新鮮な驚きがここにはあるのだろうかということだろう。だがこれは二つの理由で杞憂である。まず，本書ではポストモダン（あるいはポストモダニズム）の「時代性」が丁寧に読み解かれ，戦後から現在に至るまでのその変容の過程が，文化・政治・経済との関わりにおいて手際よくまとめられている。これは，もはや批評と時代区分の枠組みとして定着した感のあるこの用語を，批判的に吟味し直す試みとなっている。もう一つのより重要な理由は，副題にある「文化の翻訳」なる概念を「ポストモダニズム以降の文化横断的試み」と定義し，それには「ポストモダニズムそのもののあり方を大きく転回させる」ほどのインパクトがあると評価していることである。これは具体的にはベトナム系アメリカ人批評家トリン・ミンハが唱える「文化翻訳」を参照するものだが，その批評的視座から著者が放つのは，我々がつい無批判に口にしてしまう「アメリカ文化」なるものが，世界のグローバル化が進む現在においていかに再定義されうるのかという問いである。

簡単に本書の構成をまとめよう。主要な概念を導入する序論に続き，第一章ではポストモダン前史として『キャッチャー・イン・ザ・ライ』が論じられ，ホールデンの思想的スタンスと語り口に戦後アメリカの保守化の徴候が見出される。第二章ではビートルズが俎上に載せられ，芸術作品の「枠組み」と西洋近代の「枠組み」のパラレルな関係が炙り出される。レーガンとマドンナに代表される 1980 年代を扱う第三章では，さらに進行する保守化と，最盛期のポストモダン文化の商業化・商品化が検討される。第四章ではスピーゲルマンの『マウス』を中心にアメリカにおけるホロコースト表象とユダヤ系のアイデンティティーの問題が，続く第五章ではベトナム系アメリカ人（あるいは単にベトナム人）による文学作品を題材に，ポストモダニズムとマイノリティー文化の接近が詳細に論じられる。結論に先立つ第六章では，D・ジョンソン『煙の樹』と映画『グラン・トリノ』がアメリカ文化におけるベトナム表象の新機軸として紹介され，「人種・民族間の倫理的関係を再構築する」という，ポストモダニズム以降のアメリカが果たすべき課題が提示される。章立てはほぼ時系列に沿うもので，通史としての読み応えは十分であり，この構成には著者によるポストモダンの「歴史化」の狙いも反映されている。

これは我々の固定観念に揺さぶりをかける挑発の書であり，概説書を期待して本書を紐解く読者は，「ポストモダンとアメリカ文化」について抱く予断を捨て去るよう要求される。タームの用い方にいささかのブレはあるものの，それもまた今まさに起こりつつある現象に研究者として向き合ううえでは避けられないことであり，かえって本書をスリリングなものとするのに一役買っていると言えよう。

岡本太助（大阪大学・講）

Organization of American Historians 派遣来日研究者のお知らせ

2012 年度の OAH/JAAS Short Residency Program による派遣研究者が次の 3 名に決まりました。このうち一橋大学でのプログラムは 2011 年度に実施する予定でしたが，東日本大震災により延期されていたものです。

このプログラムはアメリカ史を中心に，日本の大学院生，学部生の指導と研究者の相互交流を目的とするもので，研究者は各大学に約 2 週間滞在します。研究者の専門領域，受け入れ校と担当者，滞在期間は以下の通りです。これらの研究者を招いて講演会や研究会を開催するご希望のある方は，できるだけ早い時期に受け入れ校の担当者と直接交渉し，この機会を有効にご利用下さい。

Catherine Ceniza Choy（University of California, Berkeley）
　専門領域：history of race and gender
　受け入れ校/担当者：一橋大学/貴堂嘉之会員（y.kido@r.hit-u.ac.jp）
　滞在期間：2012 年 5 月 28 日から 6 月 10 日まで

Scott Laderman（University of Minnesota, Duluth）
　専門領域：U.S. Foreign Relations in the Cold War Era
　受け入れ校/担当者：愛媛大学/土屋由香会員（tsuchiya.yuka.mx@ehime-u.ac.jp）
　滞在期間：2012 年 6 月 3 日から 6 月 16 日まで

Danielle L. McGuire（Wayne State University）
　専門領域：history of race and ethnicity
　受け入れ校/担当者：山口大学/藤永康政会員（yfujinag@yamaguchi-u.ac.jp）
　滞在期間：2012 年 5 月 25 日から 6 月 7 日まで

なお，このプログラムが 2013 年度も実施される場合，受け入れ校となることを希望される会員は 2012 年 5 月 20 日までに事務局（office@jaas.gr.jp）までご連絡ください。

国際委員会

2012 年 OAH 年次大会のためのアメリカ大使館賞受賞者
および日米友好基金による旅費・滞在費補助金の受給者について

2012 年 4 月にウィスコンシン州ミルウォーキーで開催される OAH 年次大会を対象とするアメリカ大使館賞の受賞者は臺丸谷美幸さん（お茶の水女子大学博士課程）に決まりました。

また，米国留学中の大学院生会員を対象とする旅費・滞在費補助金の受給者は以下の 4 名に決まりました。

大八木豪さん　（南カリフォルニア大学）
久野　愛さん　（デラウェア大学）
廣田秀孝さん　（ボストンカレッジ）
松坂裕晃さん　（ミシガン大学）

おめでとうございます。

国際委員会

新入会員

会田弘継	共同通信社	思　政　社
岩切博史	日本臨床政治研究所	政　外　史
星野統明	コーネル大学（院）	日　史　米
BHATTE PALLAVI	京都大学（院）	政　外　史
梅本和弘	京都大学（院）	衆　芸　社
大鳥由香子	日本学術振興会/東京大学（院）	史　思　宗
畠山望	東京大学（院）	労　社　女

編　集　後　記

深刻な不景気に悩むカリフォルニア州バークレイにいる。馴染みの本屋が，つぎつぎと学生街から姿を消した。そのうちのひとつはなんとか生き残ったが，大学周辺は家賃が高すぎるからか，街はずれにある昔飲み屋だった建物に移った。当然，近所には似たような飲み屋が多く，不似合いな感じは否めない。立ち寄る客層も変わってきているようだ。

本を物色したあとに，近くにある安い飲み屋に入り，深夜までカウンターに身を委ねた。その距離はたった一ブロック。難しいことを考えてもなんにもならない距離である。混雑する店内で，なぜか気分が楽になった。（鎌田遵）

2012 年 4 月 15 日　発行
アメリカ学会
〒153-8902 東京都目黒区駒場 3-8-1
東京大学大学院総合文化研究科附属
アメリカ太平洋地域研究センター気付
Tel & Fax（03）5454-6163
http://www.jaas.gr.jp
発行人　紀平英作
編集人　中條　献
印刷所　啓文堂松本印刷
〒162-0041 新宿区早稲田鶴巻町 565-12